

実行機能・誘惑対処方略・自己調整学習は学校満足度に影響するのか

菊野 雄一郎

(保育学科)

島根県立大学松江キャンパス
研究紀要

第 58 号

(41～49頁)別刷

2019年3月

実行機能・誘惑対処方略・自己調整学習は学校満足度に影響するのか

菊野 雄一郎

(保育学科)

Do Executive Function, Temptation Coping Strategy, and
Self-regulation Instruction Affect School Satisfaction?

Yuichiro KIKUNO

キーワード：実行機能、誘惑対処方略、自己調整、学校満足度

Executive Function, Temptation Coping Strategy, Self-regulation, School Satisfaction

1. 要約

本研究では、実行機能、誘惑対処方略、自己調整学習が学校満足度にどのように影響するかを検討するため、調査協力者である大学生に中学及び高校における学校満足度に関する調査を実施した。また、調査協力者には、大学における実行機能、誘惑対処方略についての調査が課された。結果、学校満足度は、目標の意味確認、気分転換、誘惑対処方略、動機づけ調整、情緒調整、実行機能のshifting及びabsorptionと有意に関連した。本研究結果は、学校満足度が学校生活における方略依存性を裏付けるものである。

2. 問題と目的

学生・生徒が、充実した学校生活を満喫し、満足できる学校生活を送ることは大変有意義なことである。この学校生活での満足度を高めるためにはどのような支援ができるのかを考えることは重大な課題である。本研究では、学校満足度に影響する要因にどのようなものがあるのかを検討したい。特に、実行機能、誘惑対処方略、自己調整学習の3つの要因に注目し、これらの要因が学校満足度のどのように

影響していることを明らかにしたい。

まず、学校満足度について考えてみたい。学校満足度とは、学習や友人関係など学校生活において学生・生徒がどれだけ満足して生活できるかを示したものである。学生・生徒の学校満足度が高まることで、学校での学生・生徒の考え方や行動が望ましい方向に発展していくことがいくつかの研究より示唆されている。たとえば、友人関係などでトラブルが生じた場合、子どもは一人で解決することが困難である。その際、仲間や教師に援助を要請することが、問題解決につながることが多い。永井（2009）は小学校における学校満足度と友達や教師への援助要請との間に関係が見られることを報告している。この結果は、子どもが学校で他者と協調し、相互に援助していくためにも、子どもが学校に満足していることが重要であることを示唆している。

また、クラスの雰囲気は、教師と生徒のより望ましい関係を形成するために重要な要因である。河村・武蔵・河村（2016）は、学校満足度と教師のユーモアを生徒が認識することの重要性を検証している。その結果、親和的でまとまりのある満足型の学級集団では、教師の楽しさを喚起させるユーモア

と元気づけのユーモアをより強く認識することが認められた。この結果は、学校に満足する子どもが多いほど、クラスや学校の雰囲気はより望ましく、教師と子どもの関係がより良い方向になっていくことを示唆している。また、山田・池田・赤田(2018)は、中学生を対象に運動有能感と学校満足度との関係を検討している。その結果、運動有能感と学校満足度との間に有意な相関がみられた。この結果は、練習や努力によって目標や課題を達成することで成功経験や自信を高め、学校満足度を高めることを示唆している。

学校満足度は、小中学校の生徒だけでなく大学生にとっても重要な要因であることが示唆されている。五十嵐・森山・杉本・谷(2014)は、大学生活において満足度の高い学生は学生生活を総括する時期において、現在の時間展望が高くなることを示している。また、谷・五十嵐・森山・杉本(2015)は、大学生生活の初期の時点で、協調性と学校満足度との間に正の相関がみられたことを報告した。これらの結果は、大学生にとっても、学校生活を満足することが、楽しい大学生活を過ごすために重要であることを示唆している。

学校生活において学業は大きな役割を占めている。子どもが効率的に学習を行うことができれば、学校生活を満足して過ごすことができる。そのための大事な役割として、自己調整学習がある。自己調整学習とは、効率的に学習を行うために、学習者が自ら学習方略を選択使用するように自ら調整して行う学習である(Zimmerman, 1990)。佐藤(2002)は、学習方略使用と学業成績との関係を検討している。その結果、プランニング方略を使用することが多い子どもほど学業成績が優れることが認められた。これは、適切な学習方略を使うことが学習にとって重要であることを示唆している。また、宇恵(2015)は大学生を対象として自己調整学習と学業成績との関係を検討している。その結果、モニタリング方略は学業成績と関連していることが認められた。このように、幅広い年齢で、自己調整機能は学業成績の重要な要因となっていることが明らかになっている。したがって、自己調整学習が学校満足度の要因

の一つになることが予想される。

学校場面で満足をした生活をするためには、自己を統制しながら学業を遂行することが重要である。しかしながら、子どもの周りには学業の遂行を妨げる多くの事柄や情報がある。たとえば、友人からの誘い、好きなテレビ番組、テレビゲームなどである。これらは、学生・生徒にとって大変好ましく魅力的であるが、目標を妨げる要因でもある。学業を遂行するには、これらの誘惑を主体的に無視し、避けるなど誘惑に対する自己制御が必要となる。学校満足度においても、この誘惑に対する自己制御を持つことが重要な要因になると考えられる。

小林(2013)は、学業場面において誘惑に対処する誘惑対処方略(Temptation Coping Strategy in Academic situation: TCSA)に関する尺度を作成している。TCSA尺度は、「目標意味確認方略」「気分転換方略」「誘惑回避方略」「目標実行方略」の4つの下位尺度(計20項目)で構成されている。小林・堀毛・北村(2018)は、誘惑対処方略の使用が自己統制に有効であるかを検討している。その結果、誘惑対処方略の使用が目標追求を促進していた。目標意味確認方略、誘惑回避方略、目標実行方略の3つは、目標達成の困難度にかかわらず自己統制の成功を促進しており、有効性が確認された。これらの研究から、適切な誘惑対処方略を持つほど、学校生活を満足できると予想できる。

学校生活では、学生・生徒が自分の行動をコントロールすることは大変重要である。特に、自分自身の目標を達成するのに自分の行動を調整すること、自分の欲求を抑えてルールを守ることなどは、学校における生活を満足させる上でも重要な要因である。その一つが実行機能(executive function)である。実行機能とは、自分の課題の目標を達成するために自分の思考と行動を調整する認知機能である(Miyake, Friedman, Emerson, Witzki, Howerte & Wager, 2000)。Miyake et al. (2000)は、基本的な実行機能としてルールを切り替える「Shifting機能」、情報をモニタリングし更新する「Updating機能」、優勢反応を必要に応じて抑制する「Inhibition機能」があると仮定している。

実行機能には、我々自身の行動を制御し不適切な行動を抑制するなどの機能が含まれる。そのため、我々にとって快適な生活を送るために大変有効な機能である。学校生活で、多くの人との共に行動する場面があり、他者の気持ちを推測することは大変大切である。人の気持ちを推測する能力である心の理論の発達にも実行機能は重要な要因であることが示唆されている（小川・子安, 2008; 島・桑原・東郷・森, 2016）。また、社会では他者とのより良い関係を気付く上で豊富な社会的スキルを駆使することは重要である。この社会的スキルを獲得するうえでも、実行機能が有効な要因であることが示唆されている（永野・清水, 2016）。これらのことから、学生・生徒が学校生活を満足するために、実行機能が重要な要因であることが予想される。以上より本研究では、上述した実行機能、誘惑対処方略、自己調整学習の3つの要因に着目し、これらの要因が学校満足度どのように関係しているのかを検討する。

3. 方法

1) 調査協力者

調査協力者は、大学生86名であった。内訳は、男子学生35名、女子学生51名であった。平均年齢は18.98歳、標準偏差は0.81歳、年齢範囲は18歳から23歳までであった。

2) 研究計画

本研究では、学校満足度を従属変数、実行機能、誘惑対処方略、自己調整学習を独立変数として研究を実施した。

3) 調査の手続き

調査協力者に調査用紙を配布し、調査協力を依頼した。調査を依頼する際、調査協力者に本研究の目的ならびに調査について以下の説明をした。調査協力者には調査協力で同意もしくは拒否する権利があること、調査は匿名化され研究者には調査データについて守秘義務があること、研究結果を社会にフィードバックするため学会誌等に公表することを説明した。なお、回答が成績等に影響しないこ

と、調査を拒否したい場合は調査用紙については提出する必要がないことなどを説明した。調査は調査協力者のペースに基づいて行われた。調査実施日は2018年7月19日と7月20日の2日間であった。調査時間は約15分間であった。

4) 調査項目

調査項目は、調査内容説明文、フェイスシート、学校満足度、誘惑対処方略、実行機能、自己調整学習の質問項目で構成されていた。

説明文には、研究者倫理に基づく研究題目、研究の目的、研究データの使用される範囲、守秘義務、社会的フィードバックについての記述がされていた。また、フェイスシートでは、調査協力者の年齢、性別、きょうだい数、出生順序についての質問を行った。

学校満足度については、調査協力者の中学や高校での「友達」「学習」「生活」における満足度を評定する課題であった。評価項目としては、中学と高校における、友達関係など友人面での満足度、勉強・授業など学習面での満足度、授業外・休日など生活面での満足度を評定する質問で構成されていた。これらの質問に対して「大変不満足」「不満足」「満足」「大変満足」の4件法で回答を選択するようになっていた。

誘惑対処方略については、小林（2013）の作成した誘惑対処方略尺度を用いた。誘惑対処方略尺度は、「目標の意味確認」「気分転換」「誘惑回避」「目標実行」の4つのカテゴリーにつき各3項目、合計12項目から構成されていた。「目標の意味確認」の質問項目として、「なぜその目標を達成したいかをよく考える」「自分自身にとって目標がどれだけ重要かを確認する」「達成したい目標の意味を再確認する」の項目が含まれていた。「気分転換」の質問項目として、「気分転換をして目標と向き合う」「目標を集中して行うために、気分転換をする」「気分をかえることで、集中して目標に取り組めるようにする」の項目が含まれていた。「誘惑回避」の質問項目として、「目標に集中できるように誘惑を避ける」「誘惑を我慢して目標にむけて行動する」「誘惑

のない環境を作る」の項目が含まれていた。「目標実行」では、「とにかく目標にむけて始める」「とりあえず、目標を達成するために目標達成にむけて行動する」「まずは目標達成にむけてやるべきことを実行する」の項目が含まれていた。回答は、「全くそうでない」「そうでない」「そうである」「全くそうだ」の4件法で回答するように構成されていた。

自己調整学習については、畑野・及川・半澤(2011)による自己調整学習方略尺度を用いた。自己調整学習方略尺度は、「動機づけ調整方略」「認知調整方略」「行動調整方略」「情緒調整方略」の4つの方略を測定する質問項目4項目、合計16項目で構成されていた。「動機づけ調整方略」には、「興味がなく授業でも、やる気を持って受ける」「授業内容に興味がなくなってきた、自分を奮い立たせて話を聞く」「授業中に退屈した時、頑張っけて集中する」「授業内容に興味が無くても、内容を理解するように努力する」の項目が含まれていた。「認知調整方略」には、「授業中に、これまでの理解内容を確認する」「授業で理解すべき内容を考える」「授業課題によって取り組み方を考え直す」「授業中に内容を十分に理解できなかった時、後で理解しなおす」の項目が含まれていた。「行動調整方略」には、「学習する時、学習時間を決めて取り組む」「時間を決めて学習課題に取り組む」「試験の前には計画を立てて学習する」「計画立てて学習をする」の項目が含まれていた。「情緒調整方略」には、「予想したより物事が悪くなりそうでも、心配しすぎないようにする」「物事がうまくいかない時、心配しなくていいと自分自身に言う」「事態の悪化を考えすぎないようにする」「物事がうまくいかどうかどう不安な時、大丈夫だと自分自身に言う」の項目が含まれていた。回答は、「全くそうでない」「そうでない」「そうである」「全くそうだ」の4件法で回答するようになっていた。

実行機能については、関口・紺田・中山(2009)及び関口・山田(2017)による実行機能を測定する質問紙を用いた。実行機能の質問紙は、「メンタルセットの移行：Shifting」「情報の更新と監視：Updating」「優勢な反応の抑制：Inhibition」「計画立案する能力：Planning」「自己監視する能力：

Monitoring」「注意を集中させる能力：Absorption」の6つの実行機能を測定する質問項目4項目、合計24項目から構成されていた。「メンタルセットの移行」には、「アイデアを出すのが得意だ」「問題があっても状況や相手に沿って対応できる」「新しい考え方をどんどん取り込んでいける」「楽しいことを考えると、次々に思いつく」が含まれていた。「情報の更新と監視」には、「複数のことを同時に進めていける」「一つのことしか集中できない方だ」「複数の人からの相談をされても、同時進行で上手に対応できる」「話題が変わっても、すぐに話について行ける」が含まれていた。「優勢な反応の抑制」には、「集中すると、周りの雑音など気にならない」「周りに人がいても集中できる」「次から次へと予定が入っても困らない」「騒音で注意が集中できないことがある」が含まれていた。「計画立案する能力」には、「段取りよく仕事の計画を立てられる」「長期的に計画して物事に取り組むことが苦手だ」「段取りを決めるのが得意だ」「期限のある課題は予定を組んで取り組む方である」が含まれていた。「自己監視する能力」には、「自分の発言に周囲がどう反応するかに気を使う」「周りの雰囲気に合わせて行動を合わせることができる」「人と会う約束を忘れない」「人の目に映る自分の姿に心を配る」が含まれていた。「注意を集中させる能力」には、「自分の行為を常に意識している」「興味を持ったら、そのものに、のめり込んでしまう」「ものごとに熱中しやすいたちである」「一つのこと懲りやすい」が含まれていた。回答は、「全く当てはまらない」から「大変よく当てはまる」の6件法による選択肢形式であった。

4. 結果

データ分析の際、男子学生5名、女子学生4名の合計9名のデータに空白の回答があったため、これらのデータを分析対象外とした。したがって、男子学生30名、女子学生47名の合計77名のデータを分析の対象とした。

1) 満足度の変化

表1は中学と高校での男女の学校満足度についての平均と標準偏差を示す。これについて、男女×学

表1 中学と高校での男女の学校満足度についての平均と標準偏差を示す。

	中学		高校	
	男子	女子	男子	女子
友人面	3.20±0.66	3.11±0.87	3.02±0.75	3.30±0.75
学習面	3.40±0.67	2.98±0.71	3.10±0.76	2.98±0.71
生活面	2.53±0.82	3.09±0.72	3.47±0.63	3.23±0.70

校×側面の3要因混合計画の分散分析を実施した。

分散分析の結果、男女×側面の交互作用が有意であった ($F(2,150)=5.67, p<.01$)。統計検定の結果、中学及び高校で友人面での満足度に有意な差は見られなかったが、学習面では女子よりも男子の方が満足度をしてきたことを示している。しかし、生活面では男子よりも女子の方が満足であることを示している。また、学校×側面の交互作用も有意であった ($F(2,150)=12.25, p<.01$)。中学・高校での各側面の満足度についての統計検定の結果、友人についての満足度は中学と高校では有意差が見られなかったが、学習面では高校よりも中学の方が満足度は高く、生活面では中学よりも高校の方が満足度は高いことを示している。さらに男女×学校×側面の交互作用も有意であった ($F(2,150)=9.79, p<.01$)。中学

と高校での男女の学校満足度を検定した結果、学校の主効果は有意な傾向が認められ、中学校よりも高校で学校満足度が有意に高かった ($F(1,75)=3.94, p<.10$)。男女の主効果と男女×学校の交互作用は有意ではなかった ($F_s<1.00$)。

2) 中学高校での満足度と実行機能、誘惑対処方略、自己調整学習の要因

表2は、学校満足度と自己調整学習（動機づけ調整・認知調整・行動調整・情緒調整）・自己調整学習（目標の意味確認・気分転換・誘惑回避・目標実行）・実行機能（Shifting・Updating・Inhibition・Monitoring・Absorption）の平均と標準偏差を示す。中学や高校での満足度に、実行機能、誘惑対処方略、自己調整学習がどのように関与しているかを調べる

表2 学校満足度と自己調整学習（動機づけ調整・認知調整・行動調整・情緒調整）・自己調整学習（目標の意味確認・気分転換・誘惑回避・目標実行）・実行機能（Shifting・Updating・Inhibition・Monitoring・Absorption）の平均と標準偏差を示す。

	中学・高校不満足群	高校満足群	中学満足群	中学・高校満足群
動機づけ調整	9.00±1.00	9.40±2.50	9.58±1.38	9.64±2.10
認知調整	10.88±1.17	10.30±2.49	9.83±1.77	10.43±1.92
行動調整	9.88±2.15	10.90±2.34	9.58±2.18	10.20±2.39
情緒調整	8.88±2.26	8.50±1.80	9.33±3.50	9.34±2.49
目標の意味確認	8.13±1.96	8.50±2.69	8.17±1.86	8.36±1.58
気分転換	8.25±1.92	8.90±2.12	8.58±1.71	8.98±1.58
誘惑回避	7.13±1.76	6.80±1.83	6.92±2.25	7.68±1.70
目標実行	8.75±1.56	9.10±1.92	9.17±1.52	8.55±1.41
Shifting	10.00±2.00	11.10±1.92	9.75±2.35	10.81±1.82
Updating	10.44±1.26	10.50±1.28	10.17±1.91	10.30±1.30
Inhibition	11.63±1.58	10.30±1.62	10.50±1.80	10.66±1.61
Planning	9.38±1.73	10.40±1.56	10.33±1.65	10.28±1.77
Monitoring	12.88±1.54	13.00±2.24	12.00±1.73	12.30±2.08
Absorption	11.00±2.00	11.90±3.14	11.58±1.98	12.34±2.17

表3 学校満足度と自己調整学習・誘惑対処方略・実行機能との相関係数を示す。* $p < .05$, ** $p < .01$

	中学				高校			
	友人面	学習面	生活面	満足度合計	友人面	学習面	生活面	満足度合計
動機づけ調整方略	0.11	0.02	0.274*	0.195	0.085	0.254*	0.065	0.186
認知調整方略	-0.102	-0.009	0.157	0.023	0.002	0.244*	-0.031	0.1
行動調整方略	-0.051	0.09	0.056	0.043	0.027	0.208*	0.167	0.18
情緒調整方略	0.242	0.028	0.238*	0.245	0.016	0.178	0.167	0.161
自己調整学習合計	0.078	0.046	0.238*	0.174	0.041	0.287	0.134	0.209
目標の意味確認	0.04	0.397**	-0.086	0.152	0.04	0.169	0.239**	0.2
気分転換	0.18	0.208	0.163	0.258*	0.259*	0.201	0.103	0.261*
誘惑回避	0.167	0.202	0.227	0.280*	0.092	0.332**	0.096	0.238*
目標実行	0.074	0.163	0.004	0.109	0.098	0.123	0.069	0.133
誘惑対処方略合計	0.146	0.312**	0.1	0.256*	0.153	0.266	0.164	0.266*
Shifting	0.236*	0.231*	0.065	0.247*	0.072	0.315**	0.329**	0.321**
Updating	0.076	0.212	-0.09	0.086	-0.133	0.164	0.171	0.085
Inhibition	0.024	0.091	-0.176	-0.035	-0.123	0.05	-0.048	-0.057
Planning	0.177	0.195	0.16	0.249*	0.044	0.14	0.142	0.147
Monitoring	-0.069	-0.022	0.049	-0.019	0.053	-0.025	0.018	0.022
Absorption	0.176	0.280*	0.15	0.281*	0.12	0.171	0.269*	0.252*
実行機能合計	0.151	0.234	0.054	0.202	0.027	0.193	0.218	0.195

ために、調査協力者を中学での学校満足度と高校の学校満足度で分類して、それらの群間で有意な差が見られるかを検討した。そこで、学校満足度が9点未満を不満足群、9点以上を満足群として、中学の満足度と高校の満足度の組み合わせで調査協力者を分類した。その結果、中学も高校も不満足であった「中学・高校不満足群」が8名、高校は不満足であったが中学は満足であった「中学満足群」は12名、中学は不満足であったが高校が満足であった「高校満足群」は10名、中学も高校も満足であった「中学高校満足群」は47名であった。これらの4つの群を用いて、自己調節学習、誘惑対処方略、実行機能について、中学の満足×高校の満足×下位要因の分散分析を行った。

(1) 自己調節学習

中学の満足×高校の満足×自己調整学習の分散分析を行ったところ、自己調整学習の主効果のみが有意であった ($F(3,219)=6.45, p<.01$)。そこで、LSDによる下位検定を行ったところ、動機づけ調整方略や情緒調整方略よりも認知調整方略・行動調整方略の得点が有意に高いことが明らかになった。し

かし、その他の主効果や交互作用は有意ではなかった。

(2) 誘惑対処方略

中学の満足×高校の満足×誘惑対処方略の分散分析を行ったところ、誘惑対処方略の主効果のみが有意であった ($F(3,219)=19.41, p<.01$)。LSDによる下位検定を行ったところ、誘惑回避よりも目標の意味確認・気分転換・目標実行の得点が有意に高く、目標の意味確認より目標実行の得点が有意に高かった。しかし、その他の主効果や交互作用は有意でなかった。

(3) 実行機能

中学の満足×高校の満足×実行機能の分散分析を行ったところ、実行機能の主効果のみが有意であった ($F(5,365)=20.18, p<.01$)。そこで、LSDによる下位検定を行ったところ、ShiftingやUpdating・InhibitionよりもMonitoring・Absorptionの得点が有意に高いことが明らかになった。また、学校満足度×実行機能の交互作用が有意な傾向が見られた ($F(5,365)=1.94, p<.10$)。統計検定の結果、

Shifting)においてのみ満足群が非満足群より有意に得点が高かったが、その他の実行機能では差が見られなかったことを示している。その他の主効果や交互作用は有意でなかった。

3) 中学高校での満足度と実行機能、誘惑対処方略、自己調整学習との相関係数

学校の満足度と他の要因との関係を詳細に検討するために、学校の満足度と実行機能、誘惑対処方略、自己調整学習との相関係数を算出した(表3)。

(1) 自己調節学習

自己調整学習の要因ごとに相関分析の結果、動機づけ調整方略は中学生生活面・高校学習面との相関、認知調整方略は高校学習面との相関、行動調整方略は高校学習面との相関が有意であった。さらに、情緒調整方略については、中学・生活面・中学満足度合計、自己調整学習合計では、中学生生活面との間で有意な相関が認められた。

(2) 誘惑対処方略

誘惑対処方略ごとの相関分析の結果、目標の意味確認では中学学習面と高校生活面との相関が有意であり、気分転換では高校友人面・中学満足度合計・高校満足度合計で相関が有意であった。誘惑回避では高校学習面・中学満足度合計・高校満足度合計で相関が有意であった。また、誘惑対処方略合計については、中学学習面・高校学習面・中学満足度合計・高校満足度合計で有意な相関が認められた。

(3) 実行機能

実行機能については、Shiftingと中学友人面・中学学習面・高校学習面・高校生活面・中学満足度合計・高校満足度合計との間で相関が有意であった。Planningについては、中学満足度合計との相関が有意であった。Absorptionについては、中学学習面・高校生活面・中学満足度合計・高校満足度合計との相関が有意であった。

5. 考察

本研究の主な発見は、以下の通りであった。

1) 満足度の変化について

友人面、学習面、生活面での学校満足度を中学高校での変化で見ると、(1) 友人面では中学と高校では学校満足度に有意差が得られなかった。(2) 学習面では高校よりも中学の方が学校満足度は高かった。(3) 生活面では中学よりも高校の学校満足度が高かった。

2) 学校満足度と実行機能、誘惑対処方略、自己調整学習の相関について

「実行機能」「誘惑対処方略」「自己調整学習」について、2つ以上の相関係数が有意であった下位要因は、以下の通りであった。

(1) 自己調節学習では、「動機づけ調整方略」「情緒調整方略」の下位方略で、学校満足度との強い相関がみられた。この点について、「動機づけ調整方略」とは、「興味がない授業でも、やる気を持って受ける」とか授業内容に興味が無くても、内容を理解するように努力する」という方略である。興味が無くなってもそれを乗り越えようとする経験が、学校生活をより満足させるものになったのかもしれない。また、「情緒調整方略」は、「心配しすぎないようにする」とか、「悪化を考えすぎないようにする」「不安な時、大丈夫だと自分自身に言う」という方略である。したがって、興味が無い場面や困難な場面に出会っても、それに打ち勝つようにあえてやる気を出すことや、努力をする動機づけを調整すること(動機づけ調整方略)、その状況を悪く考えないこと、大丈夫であると自分に言い聞かせるなど情緒面を調整すること(情緒調整方略)が、学校満足度につながることを示唆している。

(2) 誘惑対処方略では、「目標の意味確認」「気分転換」「誘惑回避」の下位方略で、学校満足度と強い相関がみられた。「目標の意味確認」には、「自分自身にとって目標がどれだけ重要かを確認する」「達成したい目標の意味を再確認する」などが含まれる。「気分転換」には、「気分転換をして

目標と向き合う」や「気分をかえることで、集中して目標に取り組めるようにする」という方略がある。「誘惑回避」には、「誘惑を我慢して目標にむけて行動する」「誘惑のない環境を作る」などが含まれる。これらのことを総合して考察すると、目標に向かって行動を遂行していても、目の前に魅力的なものが出現し、それに誘惑され、目標遂行を妨害する場面に出会った場合、その誘惑を我慢するか誘惑のない環境を作るなどの方略（誘惑回避方略）を使い、気分転換をし、集中力をつける方略（気分転換方略）を使うことや、自分の目標についての意味を考える目標についての再確認する方略（目標の意味確認方略）を使えることが、学校における満足度につながっていると考えられる。

(3) 実行機能では、「Shifting」「Absorption」の下位機能で、学校満足度と強い相関がみられた。「Shifting」には、「問題があっても状況や相手に沿って対応できる」「楽しいことを考えると、次々に思いつく」などが含まれる。また、「Absorption」には、「興味を持ったら、そのものに、のめり込んでしまう」「ものごとくに熱中しやすいたちである」などが含まれる。これらのことから、困った場面での状況や相手に合わせること、前向きに考えられること（Shifting機能）、物事に熱中できること（Absorption機能）が、学校における満足度につながった可能性が考えられる。

引用文献

五十嵐素子・森山雅子・杉本英晴・谷伊織 (2014) 女子短期大学生の心理的発達に関する縦断研究 (29) : 学校満足度と時間的展望の関連, *日本教育心理学会総会発表論文集*, 56, 328

河村昭博・武蔵由佳・河村茂雄 (2016) 担任教員のユーモア表出と児童のスクール・モラルおよび学級満足度との関係, *カウンセリング研究*, 49 (2), 75-84

小林麻衣 (2013) 学業場面における誘惑対処方略尺度の作成, *パーソナリティ研究*, 22, 1-12

小林麻衣・堀毛一也・北村英哉 (2018) 学業場面

における誘惑対処方略の有効性の検討, *心理学研究*, 88 (6), 525-534

Miyake, A., Friedman, N. P., Emerson, M. J., Witzki, A. H., Howerter, A. & Wager, T. D. (2000) The unity and diversity of executive functions and their contributions to complex "Frontal Lobe" tasks: a latent variable analysis. *Cognitive Psychology*, 41, 49-100

永井智 (2009) 小学生における援助要請意図-学校生活満足度, 悩みの経験, 抑うつとの関連, *学校心理学研究*, 9 (1), 17-24

永野美咲・清水寿代 (2016) 幼児の自己調整機能・実行機能が社会的スキルに及ぼす影響, *幼年教育研究年報*, 38, 43-50

小川絢子・子安増生 (2008) 幼児における「心の理論」と実行機能の関連性: ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に, *発達心理学研究*, 19, 171-182

佐藤純 (2002) 小学生における学習方略使用と学業成績の関係, *筑波大学発達臨床心理学研究*, 14, 61-67

関口理久子・紺田広明・中山皓平 (2009) 実行機能質問紙 (Executive Functions Questionnaire) 作成の試み, *日本認知心理学会発表論文集*, 2009, 141-141

関口理久子・山田尚子 (2017) 実行機能質問紙 (Executive Functions Questionnaire) の開発, *関西大学心理学研究*, 8, 41-58

島義弘・桑原麻衣・東郷清代香・森幸美 (2016) 心の理論の発達に影響を及ぼす要因の検討: 認知と社会性の個人差に着目して, *鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編*, 68, 187-198

谷伊織・五十嵐素子・森山雅子・杉本英晴 (2015) 女子短期大学生の心理的発達に関する縦断研究 (31) : 学校満足度とパーソナリティ, 愛着の関連, *日本教育心理学会総会発表論文集*, 57, 620

畑野快・及川恵・半澤礼之 (2011) 大学生を対象とした自己調整学習方略尺度作成の試み, *日本教育心理学会発表論文集*, 53, 325

宇恵弘 (2015) 大学生を対象とした自己調整学習に関する研究 (1) : 学業成績と課題実施を指標と

- して, *日本教育心理学会総会発表論文集*, 57, 594
- 山田浩平・池田裕貴・赤田信一 (2018) 中学生の運動有能感と学校生活満足度およびSelf-Esteemとの関連, *愛知教育大学研究報告教育科学編*, 67 (1), 153-158
- Zimmerman, B.J. (1990) Self-Regulated Learning and Academic Achievement: An Overview. *Journal of Educational Psychologist*, 25, 3-17

(受稿 平成30年11月19日, 受理 平成30年12月25日)

